

原著論文 明治時代出版「軍歌集」にみる軍歌の変遷について

著者	長谷川 由美子, 綿坂 豊昭
雑誌名	図書館情報メディア研究
巻	7
号	1
ページ	17-25
発行年	2009-10-30
その他のタイトル	Papers War song history related to their publications in the Meiji Era
URL	http://doi.org/10.15068/00131194

明治時代出版「軍歌集」にみる軍歌の変遷について

長谷川 由美子*, 綿 拔 豊 昭**

War song history related to their publications in the Meiji Era

Yumiko HASEGAWA, Toyoaki WATANUKI

抄録

明治時代の軍歌出版については、日本の洋楽導入とのかかわりで、その重要性について説かれているが、その基礎資料ともいべき出版された軍歌についての詳しい調査・分析がなされていないのが現状である。また「軍歌」という用語についても、統一した客観的な基準のない、便宜上のものに過ぎなかった。

そこで、「軍歌」がどのような意味で使用されているかを整理し、本研究における「軍歌」の定義をした。そのうえで、明治時代に出版された「軍歌集」を調査・分析した。そして歌詞のみを載せたものから楽譜付のものへ、外国曲の旋律を付けたものから日本人のオリジナルなものへ変遷を遂げたこと、後世に残った軍歌は楽譜付で、再録の多くは学校教育の場で使われた唱歌集でなされたことを明らかにした。

Abstract

War songs recorded in publications of the Meiji period are not enough to be investigated or analyzed as fundamental materials, since the previous studies on this area have only focused on the relations to the introduction of Western music into Japan. Moreover, the word “war song” has not had an objective or fixed meaning and has only been used for convenience.

Thus, this paper first organizes the meanings of “war song” in various occasions, and then defines “war song” particularly in this paper. In addition, it investigates and analyzes the books of war songs published in the Meiji era. Those war songs had changed from ones of only lyrics to ones with sheet music; also from those with western melodies to those of Japanese originals. Furthermore, the war songs remained in future generations were those on the music scores and most of them were recorded again in the song books which used in school curricula.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctor's Program
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

** 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

1. はじめに

日本の軍歌について述べたものとしては、すでに堀内敬三『定本 日本の軍歌』[1]、加太こうじ『軍歌と日本人』[2]、細川周平「西洋音楽の日本化・大衆化 8：軍歌」[3] などがある。

このうち明治の軍歌出版については、堀内が、日本の洋楽導入とのかかわりで、その重要性を説いている。[4] - (p.149) しかし、その基礎資料ともいべき出版された軍歌についての詳しい調査・分析はなされていないのが現状である。

そこで、本稿は、明治時代に出版された軍歌を調査・分析することによって、軍歌がどのような変遷を経たか、またどのような特徴があるかについて明らかにするものである。

2. 当論文で扱う軍歌について

「軍歌」という言葉は、明治18年7月15日刊『東京横浜毎日新聞』に「曾て外山正一氏が、新体詩抄中にもせられし抜刀隊の詩は、今度我国の軍歌となすことに定め」とあるのが初見である。

軍歌の定義についての初見は『新撰軍歌抄』[5] - (例言) であり、以下のようにある。

軍歌ハ歐洲各國ノ軍隊ニ用フルモノニシテ其章句音調等ニ至リテハ各國小異アリト雖之を要スルニ行軍中欠ク可ラサルモノトス蓋シ行軍途上之ヲ諷唱スレバ當ニ身体ノ疲労ヲ醫スルノミナラズ兵士ヲシテ其志氣ヲ震起セシメ其精神ヲ勇壯ナラシムルノ利益アレバナリ

軍歌は、行軍中の兵士が諷唱するもので、そのようにすれば、疲労を癒やし、志気を震起し、精神を勇壯とするものであるとする。

しかし、「其章句音調等ニ至リテハ各國小異」あるものであり、これをふまえてか、堀内は「軍歌とは兵士が行軍しながら歌う歌謡で（中略）どの音階、どのリズムと言うようなことをはっきり規定できない」[1]-(p.16) としている。

軍歌か否かを音階等で判断することはできないためか、日本における音楽事典として最も代表的な『音楽大事典』[6] は、軍歌を「戦意高揚・愛国精神の鼓舞を目的として軍事を歌った歌詞を持つ歌」。(山住正己執筆) としており、歌詞に注目している。

しかし、何をもって軍事を歌ったものかを判断する基

準があるわけではなく、戸ノ下は、軍歌を「統一した客観的な基準がない便宜上のもの」[7] (p.46) としている。

そこで本稿では、ピース楽譜であれ複数曲を所載する単行本であれ、出版物の「タイトル」を考察し、その「タイトル」が、以下の①から⑤の、いずれかの条件を満たしているならば、それを「軍歌集」とし、その「軍歌集」に収録されている「曲」をすべて軍歌とする。

- ①「軍」、「戦」、「兵」の語がタイトルに含まれる。（「軍歌」「海軍」「陸軍」「軍艦」「軍旗」「軍人」「従軍」「進軍」「戦争歌」「戦捷」「戦死者」「戦友」「兵士」「海軍」）。
- ②日清、日露戦争を表す言葉である「征清（征露）」、「討清（討露）」、及び戦争の行なわれた地域名がタイトルに含まれる。
- ③軍人名がタイトルに含まれる。（福島中佐、橘中佐等）。
- ④その他の戦争に関する用語がタイトルに含まれる。（「王師遠征」「凱旋」「かちどき」「護国」「出師」「出征」「勝利」「征伐」「露営」）。
- ⑤軍隊における出来事がタイトルである。（〈陸奥の吹雪〉、〈吹雪の敵〉）。

なお、下記の4点の出版物は上記の条件を満たしているが、括弧内に記した理由によって、本稿での数値に論及した部分からは除く。

『長崎軍歌』長崎、蛾眉山房、明治25年4月（長崎市の小学校校歌と既出の軍歌）。『軍人讃美歌』東京、福音社、明治28年3月（軍人向けの讃美歌集）。『勇氣凛々 消防軍歌』東京、山崎暁三郎、明治28年11月（消防士を軍人と同様に扱った消防士讃美の曲集）。『救世軍軍歌』東京、救世軍日本々營、明治34年11月（救世軍の組織が軍隊用語を用いているため、タイトルに「軍歌」が含まれているが、讃美歌と同列の曲集）

3. 「軍歌集」の総数について

明治時代の唱歌について最も詳しい書誌である『唱歌教材目録（明治編）』[8] 及びその「追補」、『唱歌索引（明治編）』[9] には、前述の①から⑤のいずれかの条件を満たす出版物が443点あげられている。

なお、より調査結果の精度を高めるため、全機関の悉皆調査ではないものの、『唱歌教材目録（明治編）』等が編まれたさいに、その調査対象となっていなかった機関で、現在蔵書目録等を公開している「日本近代音楽館」、「国文学研究資料館」、「東京都立中央図書館」、「神奈川県立図書館」、「同志社大学附属図書館」、「大阪大学附属図書館」、「九州大学附属図書館」、「大阪音楽大学音楽博

物館」,「東京大学附属図書館」,「京都府立図書館」,「慶応義塾大学図書館」を調査した。その結果,前掲書に記されていない,①から⑤のいずれかの条件を満たす出版物は62点あることがわかった [10]。

前掲書とあらたな調査結果をあわせると,①から⑤のいずれかの条件を満たす出版物は,合計調査505点ということになる。

以下,本稿では,上記505点の出版物を表す場合は《軍歌集》と表記する。上記505点の中には,1曲のみのピース楽譜として出版されたものも含むが,複数曲を所載する単行本として出版されたものが大半を占めるので,便宜上「集」とした。

また一つの作品を数える単位を便宜上「曲」とする。

また先のいずれかの条件を満たさぬ歌集に収録された作品で,後に《軍歌集》に収録された場合は,初出が《軍歌集》ではなかったことを示すために《他曲集掲載軍歌》とする。

4. 《軍歌集》出版の特徴と主要軍歌

以下調査対象とした《軍歌集》について,細川の論文 [3] を参考に明治時代を5期に分け,各期のはじめに,《軍歌集》,《軍歌集》初出曲数,《他曲集掲載軍歌》のデータをあげ,その期の軍歌出版の特徴を述べる。

なお,たとえば

《軍歌集》:85;楽譜なし

総曲数:1922

初出曲数:234

《軍歌集》初出曲数:174

《他曲集掲載軍歌》:60

とあった場合,以下のことを意味する。

《軍歌集》が85点出版され,それらはすべて楽譜がなく,歌詞だけがある。85点に収録された作品数は,重複作品を別々に数えると全1922曲である。このうち重複したものを別々に数えずに同じ作品として1曲と数えると,234曲がこの時期にはじめて《軍歌集》に収録されている。234曲の内訳は,《軍歌集》に収録されたものが174曲であるが,それに加えて《軍歌集》ではない歌集に収録され,後に《軍歌集》に再録されたものが60曲である。なお,明治22年以降のデータ中,“初出曲数 楽譜あり”とある中には「歌詞のみが以前に出版されたが,楽譜付としては初出になる」曲数は含めないこととする。

5. 明治21年以前

《軍歌集》:85;楽譜なし

総曲数:1922

初出曲数:234

《軍歌集》初出曲数:174

《他曲集掲載軍歌》:60

後述のように,最初の《軍歌集》の出版は明治19年であるが,これ以前に出版された3点の『小学 唱歌集』(東京,高等師範学校附属音楽学校,明治14-16年)所収の6曲と『日本歴史歌』(東京,増野利重,明治19年)所収の1曲は,後の《軍歌集》に収録された。

「軍歌」とタイトルにある最初の出版物は明治19年の4月に出版された河井源蔵編輯の『軍歌』[11](以下「河井版」とする)である。収録曲数は22で,うち9曲は陸海軍の儀礼歌,6曲が『新體詩抄』(外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎撰)[12]や『新體詩歌』(竹内節編)[13]に掲載された詩によるもの,そしてその他の7曲から構成されている。

その後河井版の内容を模倣した出版が続き,61点が河井版と同じ作品を収めている。そのため,重複作品が多く,《軍歌集》の出版点数が85もあるにもかかわらず,結果として初出曲数が少ない。

残りの24点は,河井版に別の作品を加えて収録したものの18点と,河井版収録作品を1曲も含まず,まったく新しい作品のみを収録したものの6点である。

この後の《軍歌集》に再録される歌詞のみの軍歌の約7割の初出はこの時期に出揃っている。

この時期に特に注目されることは『新體詩抄』と『新體詩歌』からの再録である。両詩集から再録されたものが河井版に6曲再録されているが,『新體軍歌大全』[14]にいたっては23曲が再録されている(河井版の6曲とは重複しない)。この23曲はその後何度も《軍歌集》に再録されている。軍歌は新しい詩型である「新体詩」を取り入れていったのである。

以上をまとめると,明治19-21年の3年間に出版された《軍歌集》に,明治期の歌詞のみの軍歌の約7割が収録されており,後の軍歌における歌詞の雛形を示した時期であったといえる。また『新體詩抄』『新體詩歌』所載の作品を,軍歌として多く再録している点は「新体詩」の普及を考えるさいに注目に値しよう。

6. 明治 22-26 年

《軍歌集》：83

楽譜あり 27

楽譜なし 56

総曲数：2957

初出曲数：568

楽譜あり 52

旋律指定 24 [15]

楽譜なし 492

《軍歌集》初出曲数：505

楽譜あり 30

旋律指定 24

楽譜なし 451

《他曲集掲載軍歌》：63

楽譜あり 29

楽譜なし 34

明治22年7月にははじめて楽譜付の軍歌集『新軍歌』[16]が出版された。全19曲が収録されている。その19曲はいずれも『新軍歌』以前の《軍歌集》もしくは《軍歌集》以外の歌集に収録されたものであり、その意味では初出のものはないが、五線譜が付された〈君が代〉、〈矢弾丸〉、〈三千餘万〉、〈進撃及び追撃〉の4曲は軍歌として初出であり、〈進撃及び追撃〉は初の外国曲の旋律による軍歌となる。なお〈進撃及び追撃〉は《軍歌集》によっては〈進撃〉と〈追撃〉に分かれて扱われることもある。

明治時代には多くの定期刊行物が発刊された。それに唱歌等が発表され、後に歌集所載の1曲として、またピース楽譜として出版される事例が出てくる。その初見が、明治24年の〈凱旋〉(永井建子詞曲)(詞は明治21年に成る)である。[17]このスタイルは《軍歌集》の分野ではじまり、他の音楽作品にひろまっていった。

明治25年4月、『日本軍歌』が出版された。[18]同年5月8日付の『東京日日新聞』に同出版社の『帝國唱歌』『青年唱歌集』と並んで『日本軍歌』の広告が掲載された。これが軍歌の広告が新聞に掲載された初見で、以後出版広告がしばしば新聞に掲載された。

『日本軍歌』は東京音楽学校教官の納所辨次郎が編集した五線譜による《軍歌集》で、全21曲中20曲が初出、残り1曲は詞が「河井版」に掲載されていたが楽譜付としては初出である。15曲は外国曲の旋律で、6曲が日本人の作品である。

また21曲中16曲はその後何度も唱歌集に再録された。それまでは一つの旋律に多くの異なる歌詞をあてはめていたが、この『日本軍歌』は一つの歌詞に対して一つの旋律が使われた最初の例である。また編纂に学校唱歌作曲家が関わった初見の《軍歌集》であり、これ以後唱歌作曲家は積極的に《軍歌集》編纂に参加するようになっていく。

明治26年8月に〈君が代〉〈勅語奉答〉〈一月一日〉〈原始祭〉〈紀元節〉〈天長節〉〈神嘗祭〉〈新嘗祭〉の8曲が『祝日大祭日唱歌』として制定された。明治26年以前に誕生した〈君が代〉と〈紀元節〉は多くの曲集に収録されているが、『祝日大祭日唱歌』制定により、明治26年以降出版の《軍歌集》にも残りの6曲が頻繁に再録されるようになった。[19]

以上をまとめると、この時期に注目される点としては、楽譜付軍歌が出版され、その多くは外国曲の旋律であったこと、唱歌作曲家の編集による《軍歌集》が出版されたこと、新聞への出版広告が掲載されるようになったこと、祝日大祭日唱歌8曲が《軍歌集》に収録され、それらの曲が軍歌とみなされるようになったことがあげられる。

7. 明治 27 年 - 明治 28 年

《軍歌集》：144

楽譜あり 55

楽譜なし 89

総曲数：3343

初出曲数：1443

楽譜あり 341

旋律指定 122

楽譜なし 980

《軍歌集》初出曲数：1433

楽譜あり 332

旋律指定 122

楽譜なし 979

《他曲集掲載軍歌》10

楽譜あり 9

楽譜なし 1

前年までに出版された《軍歌集》の総数が168点であったのに対し、この時期、日清戦争があり、144点もの《軍歌集》が出版された。そのため「当時軍歌の出版殆ど紙價を狂わしむるの今日」[20] - (p.33)といわれることもあった。

後の《軍歌集》、唱歌集への再録が多い軍歌を収録した《軍歌集》は以下のとおりである。

小山作之助編『忠実勇武 軍歌集』（東京、共益商社、明治27年8月）（数字譜付）は、全20曲のうち19曲が初出、楽譜付初出が1曲、このうち4曲は外国曲の旋律である。

納所辨次郎・鈴木米次郎編『明治軍歌 全』（東京：博文館、明治27年11月）（数字譜付）は、全30曲のうち23曲が初出、楽譜付初出が1曲、《軍歌集》初出が5曲で、16曲は外国曲の旋律である。

山田源一郎編『教科適用 大捷軍歌』全7巻（東京、十字屋、明治28-30）は全28曲のうち初出が27曲、楽譜付初出が1曲である。雑誌『音楽雑誌』51号（明治28年3月）に『大捷軍歌』の広告が載った際は“（木版楽譜入）”の言葉が宣伝として使われた。楽譜付が「売り」となってゆく様子がみとれる。

小山作之助編『忠勇軍歌集』全2巻（東京、共益商社）（数字譜つき）は全29曲中、第2巻の13曲が初出、楽譜付初出は第2巻の1曲である。

明治28年、讀賣新聞社は「懸賞軍歌」で歌詞を広く募集した。それをもとに編集したのが『大東軍歌』（大日本図書、明治28）である。これは雪雪花の3巻に分かれており、「雪」「月」が2巻一緒に6月に、「花」は10月に出版された。「雪」「月」の収録曲217曲のうち137曲が初出で、「花」の収録曲43曲のうち38曲が初出、『大東軍歌』全体で72曲が譜付初出、2曲が外国曲の旋律である。新聞主導の軍歌歌詞の募集は昭和の戦争で東京日日新聞・大阪毎日新聞、朝日新聞、読売新聞、報知新聞等がおこなったが、『大東軍歌』はその先駆けである。

明治27年に頻繁に《軍歌集》に登場した曲が、〈應てや懲らせや〉、〈北京まで〉、〈丈夫〉、〈叡慮〉の4曲の『討清軍歌』（初出：東京、博聞社、明治27年8月）である。いずれも〈抜刀隊の歌〉[21]の旋律をそのまま使用した。各詩の長さは一定でないため、ある節を繰り返すことによって旋律が増減される。『音楽雑誌』47号（明治27年9月）はニュースとして「討清軍歌。鎮西山人の作歌にて我は官軍の曲譜を附したるもの府下の各書店にて發賣せり」と伝えている。[20] - (p.33) この4つの曲は歌詞のみでの出版を入れると50点の《軍歌集》に掲載された。時期は明治27年が圧倒的に多く、明治28年にはまだ出版されているが、〈丈夫〉を除く3曲はその後《軍歌集》や唱歌集への再録はない。

明治27年8月以前の《軍歌集》では歴史上の人物や戦争にまつわるもの、忠君愛國を強く押し出した歌詞が多かったが、8月以降、実際の戦闘をニュースのように

歌詞にした軍歌が大半を占めるようになる。戦闘のおこなわれた地名（豊島沖、牙山、成歓駅、平壤、黄海、鴨緑江、旅順、威海衛）や軍艦名、軍人の名前を読み込んだ歌詞が多く、描写は具体的であった。開戦は7月25日の豊島沖であるが、この開戦をうたった歌詞が、翌月の8月に刊行された19点の《軍歌集》に発表されている。《軍歌》は具体的な戦闘状況の描写と速報性という「報道メディア」[22] - (p.155-) として機能したのであった。

また、これまで唱歌や軍歌を多く作詞した人たちも作詞しているが、量的には、日清戦争時のみの、一時的な「軍歌作詞者」になった人のものが多い。明治天皇をはじめとして、山県有朋のような政治家、戦闘に従事した兵士までと、さまざまな階層の人々が競って詞を作っている。一人の作者が微に入り細に入り戦闘のはじめから終わりまでを描写して一冊にまとめる方法も採用された。

日清戦争時の軍歌は次の日露戦争時に較べると、清国を揶揄した非常に下品な歌詞が目につく。最初の出版（『ちやんちやん征伐音曲集』（東京、東雲堂、明治27年2月）は実際の戦争開始以前の2月に出版された。実戦が始まるとますます多くの清国揶揄の歌詞を持った軍歌集が出版された。[23]「東雲堂より發賣せり斬新快活なる流行歌の曲譜を集めたるもの再版再版で主人は大黒顔の悦び」と報じられた [24] - (p.38) ことなどから、出版が民衆に歓迎された様子がうかがわれる。清国人を弁髪からの連想で「豚尾」と蔑み、ある時は漫画付で執拗に敵国人を描いた。単に詞として発表されたものも多いが、日本の俗曲の旋律にあわせて歌うよう指示された曲もある。その歌詞の卑猥さ、下品さを糾弾する論調が数多く『音楽雑誌』に掲載され [25] - (p.29) [26] - (p.5)、教育上弊害があるとして遠ざけられていた俗曲が中国人蔑視のために使われた。このような歌詞には、西洋音階による旋律は付かなかった。

以上をまとめると、この時期の特徴は、大量の出版、戦闘に関する固有名詞（地名、軍艦名、軍人名）を読み込んだ軍歌によるルポルタージュ、多くの階層の人々によって作られた歌詞、俗曲の旋律にのせた清国揶揄といえよう。

8. 明治29-36年

《軍歌集》：47
 楽譜あり37
 楽譜なし10
 総曲数：1248

初出曲数：226

楽譜あり 105

旋律指定 2

楽譜なし 119

《軍歌集》初出曲数：212

楽譜あり 93

旋律指定 1

楽譜なし 118

《他曲集掲載軍歌》：14

楽譜あり 12

旋律指定 1

楽譜なし 1

北清事変に関する出版物が多少あるものの数は少なく、それを扱った軍歌は『日東軍歌』（東崖堂、明治33年、全25曲。初出10曲）『勇氣發揚 日本軍歌大全』（盛花堂、明治33年、全137曲。初出19曲）、『旭日軍歌大全』（朝日軍歌大全とも記す）（武田音作、明治33年、全109曲。初出17曲）のそれぞれの初出の一部にすぎない。

9. 明治37年以降明治末年まで

《軍歌集》：146冊

楽譜あり 127

楽譜なし 19

総曲数：1283

初出曲数：453

楽譜あり 293

旋律指定 0

楽譜なし 160

《軍歌集》初出曲数：434

楽譜あり 274

楽譜なし 160

《他曲集掲載軍歌》：19

楽譜あり 19

明治37年勃発の日露戦争に関する軍歌が多く出版される。楽譜付軍歌の割合が高く、一つの軍歌集に収録される曲数が減る。さらに1曲だけで出版されるピース物が88冊と、総出版数の約半分を占める。それにもかかわらず総曲数や楽譜なし軍歌集が多いのは、大部な軍歌集『日本大軍歌』（東京：大川屋書店、明治37年4月。楽譜なし）が出版されたためである。西洋曲の旋律を借用した軍歌が減り、圧倒的に日本人の作ったものが多い[27]。

しかし、堀内らが指摘するように [1] (p.148) [28] (p.24) [29] (p.278) [30] (p.398) [31] (pp.47-48) 今日に至るまでの文献に必ず登場するような軍歌の定番とも言うべき曲は日清戦争時の軍歌に較べると少なく、後世に残った曲は〈戦友〉と〈軍艦行進曲〉のみになる。赤塚の言うように [22] (p.167), 「報道メディア」としては機能しなくなったことがその原因の一つではあるが、その後平和な時代が続いて、軍歌の需要がなくなり、歌い継がれてゆく機会を逸したことや、音楽面からいえば、曲としての特徴が見出せない事も原因として指摘できよう。

10. 「軍歌」から唱歌へ

細川は「軍歌はたやすく校門に入っていった」[3] (p.99)と述べている。最後に、この点についてみる。

まず、《軍歌集》は「学校教育」に関係する言葉を持った出版物が多い。明治27-30年の『大捷軍歌』には「教科適用」の言葉が角書として付いているが、それ以外にも「教育軍歌」「生徒必携」「小學教育」等の文言を付した《軍歌集》の数は30点にのぼる。出版年代は明治22年から45年まで各年代に渡っている。同様に「唱歌」の語が付された《軍歌集》が、明治37年を境に35点出版されている。また、『學生唱歌 帝國軍歌大全』（大阪、吉岡宝文館、明治26年10月）のように、「学校教育」に関する言葉と「唱歌」という言葉の両方が付けられているものもある。これらの《軍歌集》の11点には譜がないが、残り55点は譜付《軍歌集》である。明治22年以降の譜付《軍歌集》の総数は242冊、その約23%は曲集の表題に学校教育に関する言葉が付けられている。

次に軍歌を多く作った作詞者、作曲者はともに唱歌の作詞者、作曲者だということが挙げられる。作曲者では小山作之助、納所辨次郎、田村虎蔵、奥好義、鈴木米次郎、古谷弘政、白井規矩郎、山田源一郎、上眞行、永井建子、多梅稚、楠見恩三郎、三善和氣、内田叅太郎。作詞者では大和田建樹、中村秋香、菟道春千代、佐々木信綱、鳥居忱、山田淳、鳥山啓、池邊義象、坂正臣、眞下飛泉である。曲数が多い人物はほかにもいるが、年代が限られており、自分の編纂した《軍歌集》だけに名前が見つかる。それに対して上述の人々の歌詞や旋律は数年にわたりさまざまな《軍歌集》に収録された。（古谷弘政だけは発表が明治28年と限られているが、多くは再録されている）。

また《軍歌集》収録の曲が再録される場合、多くは《軍歌集》ではなく、他の曲集である（巻末「再録回数10回

以上の軍歌一覧」参照)。ごく初期には唱歌集から《軍歌集》への流れもあるが、後には《軍歌集》収録の曲が唱歌になる場合が圧倒的に多い。名称に「軍歌」やその他戦争関係用語が付けられた大量の出版物中の軍歌は、歌いやすい旋律がつくことによって唱歌の分野に流れ込んだのである。

11. まとめ

明治19年に端を発する軍歌集の出版は、陸海軍の「儀礼歌」や「新体詩」からの詞を繰り返し載せた楽譜の付かない詞集を“唱え”[32] (p.192) ることから始まった。時代が進むにつれて唱歌作曲家編集による楽譜付の軍歌が出版されるようになり、最初は外国曲に頼っていた旋律は次第に日本人が作曲するようになっていった。出版点数の上では明治27年にピークを迎え、それまでの軍歌に多かった歴史上の人物や戦争にまつわるものや忠君愛国を強く押し出した詞は戦争の様子を映し出す現実に即したルポルタージュ風になっていった。数の上では多いこの時代の軍歌の多くは再録されなかったが、楽譜付きの軍歌はその後も他曲集に収録された。日露戦争から明治末年の《軍歌集》は、日本人のオリジナル曲、楽譜付の軍歌であり、大部の《軍歌集》ではなく、ピース楽譜あるいは一点に5、6曲掲載の《軍歌集》と前の時代に較べて明らかな違いが生じるが、後世に残った曲は少ない。

また、初出が《軍歌集》でありながら、唱歌に再録された作品は多い。曲の再録が《軍歌集》の中でなく、学校教育の現場で使われた唱歌でくりかえしなされたことにより、「軍歌」は「唱歌」に変身を遂げた。レコードは入手困難な時代で[33]、曲の流布は学校における唱歌教育と出版物によっておこなわれた。再録回数の多い軍歌の作曲家は唱歌の作曲家でもあり、自身の作った曲を自身の編集する唱歌集にも《軍歌集》にも載せられる立場にあった。日本の音楽史において、軍歌は唱歌の一部となって国民全体に西洋音楽風の旋律を流布させ、今日に続く西洋音楽隆盛の基となったという点で、重要な意味を持つのである。

注・文献

- [1] 堀内敬三. 定本 日本の軍歌. 東京, 実業之日本, 1969, 329 p.
 [2] 加太こうじ. 軍歌と日本人. 東京, 徳間書店, 1965, 236 p.

- [3] 細川周平. 西洋音楽の日本化・大衆化 8 : 軍歌. Music Magazine. 1989, 21 (14) pp.94-99.
 [4] 音楽五十年史. 堀内敬三. 東京, 鱒書房, 1942, 448 p.
 [5] 新撰軍歌抄. 大庭景陽編纂. 大阪, 中村芳松, 明治21年3月. 例言 (ページ付なし). 同じ『新撰軍歌抄』というタイトルで、この例言の入っている書物が他に3冊確認できる. 京都, 川勝徳治郎, 明治21年3月; 大阪, 大華堂, 明治21年4月; 大阪, 山口恒七, 明治21年6月
 [6] 音楽大事典. 東京, 平凡社, 1981, 6冊
 [7] 戸ノ下達也. 音楽を動員せよ. 東京, 青弓社, 2008, 270 p.
 [8] 唱歌教材目録 (明治編). 国立音楽大学音楽研究所年報. 1980, 4, 218 p.
 [9] 唱歌索引 (明治編) 曲名・歌詞索引. 音楽研究所年報. 1984, 5 別冊, 629 p.
 [10] 大阪音楽大学音楽博物館の所蔵は小西潤子. 明治期歌資料楽譜目録 (大阪音楽大学音楽博物館年報音楽研究. 2008, 23, pp.129-337. CD-ROM) を, 日本近代音楽館を除く他の9館の所蔵はそれぞれのOPACを検索. 日本近代音楽館については同館司書に事前に調査を依頼した上で来館.
 [11] 軍歌. 東京, 有則軒, 1886
 [12] 新體詩抄. 東京, 丸屋善七, 1882
 [13] 新體詩歌. 山梨, 微古堂, 1882
 [14] 新體軍歌大全. 大阪, 図書出版, 1887
 [15] 楽譜は記されていないが、旋律が指定されているものを旋律指定とする.
 [16] 新軍歌. 東京, 寿盛堂, 1889. 8月出版の『新軍歌』(音楽書房, 発売元は寿盛堂) は同一のものだが、ページ割が異なる.
 [17] 永井詞・曲の〈元寇〉, 〈雪の進軍〉, 永井詞・ベッリーニ曲の〈月下陣〉それに菊間義清詞・奥好義曲の〈婦人従軍歌〉等、後の文献でしばしば取り上げられる曲がこの形で発表された.
 [18] 日本軍歌. 東京, 博文館, 1892
 [19] 参考: 奥中康人. “五線譜による儀式唱歌の国楽化”. 近代音楽・歌謡の成立過程における国民性の問題. 平成13・14年度科学研究費補助金研究成果報告書. 劉麟玉. 善通寺, 劉麟玉, 2003, 13610063, pp.73-84.
 [20] 音楽雑誌. 1894, 47.
 [21] 『新體詩抄』掲載の詞で、《軍歌集》初出は明治19年『軍歌』(有則軒)、以後130回以上再録された. 楽

譜付の初出は『唱歌の友』（東京，寿盛堂，明治21年12月）（曲はシャルル・ルルー）

- [22] 赤塚行雄. 『新體詩抄』前後—明治の詩歌. 東京，學藝書林，1991，447，54 p.
- [23] 『義勇奉公 出師軍歌』（大阪，高田文賞堂，明治27年8月），『滑稽軍歌集』（東京，栗原書店，明治27年9月），『討清日本勝利歌』（東京，岡村庄兵衛，明治27年12月）『ちゃんちゃん滑稽軍歌』（東京，野村銀次郎，明治27年12月），『支那征伐 國の光』（富山，佐野秀二，明治27年12月），『ちゃんちゃん征伐音曲集』（東京：盛花堂，明治28年1月）等.
- [24] 音楽雑誌. 1895, 50
- [25] 音楽雑誌. 1894, 45
- [26] 音楽雑誌. 1894, 46
- [27] 楽譜付きの293曲中，256曲は日本人作品で2曲は外国曲である. 残り35曲は作曲者の表示がない. そのうち5曲は外国曲の可能性もあるが，現時点では原曲が判明していない. 残り30曲は日本のわらべ歌の使用，あるいは日本音階による旋律線，あるいは旋律線の稚拙さや不自然さから判断して外国曲ではありえない.
- [28] 坂元圭太郎. 物語・軍歌史. 東京，創思社出版，1984，489 p.
- [29] 小川寛大. 海行かばを歌ったことがありますか. 東京，エイチアンドアイ，2006，319 p.
- [30] 藤澤衛彦. 明治流行歌史. 東京，春陽堂，1929，479，18 p.
- [31] 丘灯至夫. 日本歌謡史 明治・大正・昭和歌謡集. 東京，彌生書房，1961，158，5 p.
- [32] 鈴木鼓村. 耳の趣味. 東京，左久良書房，1913，336 p.
- [33] 明治24年に国産第一号の蠟管レコード誕生，明治40年日米蓄音器製造株式会社が日本初の平円盤レコード製造を始めた. 参考：倉田喜弘，日本レコード文化史. 改訂版，東京，東京書籍，1992. 272 p.

再録回数10回以上の《軍歌》一覧

再録10以上で，《軍歌集》1回以上で取り上げられた楽譜付《軍歌》は以下の通りである。記入項目は①歌詞の初出②曲の初出③《軍歌集》初出④収録状況⑤その他。なお『祝日大祭日唱歌』8曲は省いた。

- 〈皇御國〉 加藤司書，里見義詞 伊澤修二曲
②『小学 唱歌集 第二編』（東京，高等師範学校付属

- 音楽学校，明治16年3月）③『帝國 音楽軍歌集』（東京，東雲堂，明治26年10月）④《軍歌集》1 他28
〈来れや来れ，皇國の守り〉 戸山正一詞 伊澤修二曲
②『明治唱歌 第一集』（東京，中央堂，明治21年5月）
③『新撰軍歌 第一集』（東京，壽盛堂，明治23年5月）
④《軍歌集》2 他22
〈矢彈丸〉 詞不明 伊澤修二曲
②『幼稚 唱歌集 全』（大阪，普通社，明治20年3月）
③『新軍歌』（東京，壽盛堂，明治22年7月）④《軍歌集》4 他26
〈三千餘万〉 詞不明 芝葛鎮曲
②『家庭唱歌 第一集』（東京，普及舎，明治20年8月）
③『新軍歌』（東京，壽盛堂，明治22年7月）④《軍歌集》4 他9
〈進撃〉 鳥居忱詞 ルソー曲
②『家庭唱歌 第一集』（東京，普及舎，明治20年8月）
③『新軍歌』（東京，壽盛堂，明治22年7月）④《軍歌集》3 他15⑤初出では同じ旋律で歌詞が多少異なる〈追撃〉が1番目，〈進撃〉が2番目で別の曲として掲載されたが，次第に同じ曲として扱われ，〈追撃〉の歌詞が〈進撃〉の2番となった。
〈國旗〉 詞，曲とも不明
②『家庭唱歌 第三集』（東京，普及舎，明治22年3月）
③『明治軍歌 全』（東京，博文館，明治27年11月）④《軍歌集》1 他9
〈御國の民〉 詞不明 ホプキンソン曲
②『中等唱歌集』（東京，高等師範学校附属音楽学校，明治22年12月）③『明治軍歌 全』（東京，博文館，明治27年11月）④《軍歌集》3 他17
〈觀兵式〉 小田深蔵詞 小山作之助曲
②『國民唱歌集』（東京，共益商社，明治24年7月）③『帝國 音楽軍歌集』（東京，東雲堂，明治26年10月）④《軍歌集》1 他10
〈敵は幾萬〉 山田美妙詞 小山作之助曲
②『國民唱歌集』（東京，共益商社，明治24年7月）③『軍人學生 陸海軍歌新集』（東京，東崖堂，明治30年3月）④《軍歌集》1 他9⑤明治27年〈進め矢玉〉と題を変更
〈すすめすすめ〉 戸川安宅詞 ステッフ曲
③『日本軍歌』（東京，博文館，明治25年4月）④《軍歌集》2 他10
〈海ゆかば〉 詞不明 東儀季芳曲
①『軍歌』（東京，有則軒，明治19年4月）
②③『日本軍歌』（東京，博文館，明治25年4月）
④《軍歌集》2 他12⑤瀬戸口藤吉作曲〈軍艦行進曲〉

(東京，音楽社，明治43年7月)の中間部に使用.

〈火砲の雷〉 詞不明 ウィルヘルム曲

①②『中等唱歌集』(東京，高等師範学校附属音楽学校，明治22年12月)③『明治軍歌 全』(東京，博文館，明治27年11月)④《軍歌集》2 他10

〈凱旋〉 佐々木信綱詞 納所辨次郎曲

③『日本軍歌』(東京，博文館，明治25年4月)④《軍歌集》1 他15

〈大和島根〉 戸川安宅詞 トーマス曲

③『日本軍歌』(東京，博文館，明治25年4月)④《軍歌集》1 他11

〈我海軍〉 戸山正一詞 山田源一郎曲

③『新編 帝國軍歌』(大阪，三木佐助，明治27年3月)④《軍歌集》5 他9

〈朝日に匂う〉 中村秋香詞 小山作之助曲

③『忠実勇武 軍歌集』(東京，共益商社，明治27年8月)④《軍歌集》4 他9

〈進め矢玉〉 中村秋香詞 小山作之助曲

③『忠実勇武 軍歌集』(東京，共益商社，明治27年8月)④《軍歌集》6 他19

〈婦人従軍歌〉 菊間義清詞 奥好義曲

① 音楽雑誌48号(明治27年10月)②③『婦人従軍歌』(東京，井上藤吉，明治27年10月)④《軍歌集》1 他12

〈坂元少佐，坂本少佐〉 佐々木信綱詞 納所辨次郎曲

③『教科適要 討清軍隊 大捷軍歌 第二編』(東京，開新堂書店他，明治27年12月)④《軍歌集》1 他10

〈軍艦，黄海の戦〉 中村秋香詞 多梅稚曲

③『新編 帝國軍歌 第一集』(大阪，武田交盛館，明治28年3月)④《軍歌集》2 他10

〈豊島の戦，雞の林〉 小中村義象詞 納所辨次郎曲

③『討清軍隊 大捷軍歌 初編』(東京，開新堂書店他，明治27年11月)④《軍歌集》1 他9

〈勇敢なる水兵〉 佐々木信綱詞 奥好義曲

③『教科適要 大捷軍歌 第三編』(東京，十字屋書店他，明治28年4月)④《軍歌集》1 他10

〈行路難〉 中村秋香詞 ルート作曲

③『かちどき 第弐』(東京，共益商社，明治28年6月)④《軍歌集》1 他9

〈威海衛〉 中村秋香詞 山田源一郎曲

③『教科適要 大捷軍歌 第四編』(東京，十字屋書店他，明治28年6月)④《軍歌集》1 他9

〈雪の進軍〉 永井建子詞曲

①『音楽雑誌』52号(明治28年8月)②③『大東軍歌 花の巻』(東京，大日本図書，明治28年10月)④《軍歌集》1 他7

〈箱根八里〉 鳥居忱詞 滝廉太郎曲

①『中學唱歌』(東京，東京音楽学校，明治34年3月)

③『教育軍歌 整旅』(仙台，三澤書店，明治35年8月)

④《軍歌集》1 他10

(平成21年3月27日受付)

(平成21年7月28日採録)